

昨年度を振り返って

理事長 長谷川 憲 治

昨年度を振り返りますと、まさに「コロナに明け暮れた1年」という言葉に尽きると思います。期首直前に県内でも初めての感染者が確認されて以来連日のように感染者の発表が続き、5月からは落ち着いたものの11月から再び増加に転じ今年の3月中旬以降は連日10人を超える感染者の発表や、クラスターや変異型ウィルスの発生等が続きました。

そのような環境下、山形いのちの電話でも大きな影響を受け、多くの研修会や会議等が延期や中止、或いは書面決議等を余儀なくされました。又、後援会の目玉事業でもあります「チャリティーコンサート」も中止の止む無きに至りました。しかし、最も重要な電話相談に関しては、相談員の方々の高い志と使命感、そして事務局員の方々の懸命の除菌作業とが相俟って、殆んど休止する事無く継続する事が出来ました。他地区の多くの「いのちの電話」が活動を休止せざるを得ないなかで、素晴らしい成果だと思えます。お陰で、昨年暦年での電話相談件数は7,240件となり、一昨年7,131件を上回る事が出来ました。相談員・事務局員の皆様に改めて心から感謝とお礼を申し上げます。

課題であります相談員の確保も、昨年度は10名、今年度は新たに6名の方々が認定を受けられ相談員に加わって頂きました。相談員という「困難ながら極めて意義のある仕事」に取り組んで頂ける事は、誠に有難く嬉しい限りであります。心から歓迎申し上げますと共に、末永く活動を続けて頂きますようご期待申し上げます。

又、嬉しい事に「山形いのちの電話」に寄付をして下さる企業や団体が増えてきております。コロナの影響で資金的に困窮している団体が多いなかで本当に有難い事で、「山形いのちの電話」へのご理解が進んでいる表れかと喜んでおります。

今年度は、引き続きでのコロナ対策や相談員の募集と継続、そして事務局移転への対応等課題は山積しておりますが、悩んでおられる方々や困窮しておられる方々、そして自殺者も残念ながら増えてきており、「山形いのちの電話」への期待や意義・役割は益々高まると思えます。これからも「悩んでおられる人々に少しでも寄り添い、お役に立てれば」との想いで活動を続けて参りますので、変わらぬご理解とご支援を宜しくお願い申し上げます。

いのちの電話の目的

いのちの電話は、孤独の中にあつて、時には精神的危機に直面し、自殺をはじめ、助けと励ましを求めている一人一人と、主に「電話」という手段で対話することを目的とする。